

板坂則子教授を送る辞

小山内 伸

板坂則子先生は、群馬大学の助教授を経て、専修大学に一九九二年、文学部の教授としてご着任になりました。以来、学内では文学部FD委員長、広報委員、図書館委員などほとんどの役職をお勤めになられています。

板坂先生のご専門は江戸時代の戯作で、殊に曲亭馬琴のご研究では国内有数の専門家と目されています。二〇一〇年には『曲亭馬琴の世界 戯作とその周縁』（笠間書院、同年）で東京大学から博士（文学）の学位を授与されています。

近年のご著書『江戸時代恋愛事情 若衆の恋 町娘の恋』（朝日新聞出版、二〇一七）は一般読者向けに書かれたものでありながら、江戸初期の仮名草子から後期の戯作まで数多くの小説や浮世絵を仔細に読み解き、そこに描かれた恋愛を分析・考察した含蓄に富む好著となっています。時代を追うごとに、あるいは階級・教養・性別ごとに恋愛観がどのように変化していったかを緻密に追ひ、江戸期の文化・風俗の変容を浮かび上がらせています。更に、女性たちの破天荒な活躍を描く馬琴の『傾城水滸伝』や、江戸後期の少女たちを読者対象とした人情本などの分析を通じて、ジェンダー論へと探究の裾野を広げていらつしやいます。

一方で、教育者としての板坂先生は学生たちに大変な人気がありました。板坂ゼミは毎年、定員を大幅に超える志望者があり、選抜となりました。それは、学生に対する手厚い指導のみならず、特色ある教育を行って来られた賜物だと拝察されます。

1 板坂則子教授を送る辞

板坂ゼミナールでは、二十年近く前から海外の大学と提携して二通りのネット授業を行って来ました。一つは「共同授業」で、海外の大学の教室と専修大学の教室をインターネットで繋ぎ、両大学の学生が参加して発表や議論を行うものです。もう一つは「遠隔授業」で、海外の大学の教員にオンライン授業を行ってもらい、リアルタイムで質疑応答するというものです。コロナ禍の二〇二〇年以降、オンライン授業は普通に行われるようになりましたが、板坂先生はこれを非常に早い段階から、しかも国際的に採り入れられていたのです。相手国も、英国、ドイツ、イタリア、米国、カナダ、台湾、韓国、中国、エストニアなど十か国ほどに及びます。ゼミ生にとっては、海外の人と話すことと、IT技術に慣れる絶好の機会となり、その結果、IT関係に就職した卒業生が多数いるそうです。

さらに、ゼミ生とオペラ『八犬伝』の共同執筆までなさっています。この台本は実際に、二〇〇六年一月に東京都北区の北とびあホールで二日間にかけて上演されました。

最後に、板坂先生の温かいお人柄について触れておきたいと思います。私のように異業種から大学に転職して来た者にも板坂先生はとても親切で、「何か困ったことはない？」と頻繁に声をかけて下さり、ありがたい助言をしてくださいました。また、学部・学科の仕事を割り振る際にも担当を率先して引き受けてくださいました。その姿勢は退職される直前まで変わることがありませんでした。「専修大学で勤務して最も印象に残っていることは何ですか？」とお尋ねしたら「毎年三月の卒業式。嬉しくて胸いっぱいになります」とお答えになったことも忘れられません。

先生が専修大学のキャンパスを去られるにあたって惜別の思いはなお尽きませんが、日本語日本文学文化学会を代表し、深い謝意を込めて送別の辞とさせていただきます。

二〇二一年九月